

教員志望大学生は映画『ブタがいた教室』をどのように評価したか —ケアリングとの関連で—

齋藤 美保子〔鹿児島大学教育学部（家政教育）〕

How university students aspiring to teaching jobs evaluated the film “Buta ga ita kyōshitsu (School Days with a pig)”
— An Examination of the Relationships to Caring —

SAITO Mihoko

キーワード：教員志望大学生，動物飼育，ケアリング，食育，家庭科

1. はじめに

子どもたちをはじめ、国民のあらゆる世代が健康で文化的な生活を生涯にわたっておくられるよう、平成17年『食育基本法』が制定された。また学校教育では、新学習指導要領の改訂が行われ、小・中・高校すべての家庭科の教育内容に「食育」の充実が揚げられ、学校における食育の推進を一層すすめている。

食育といっても「食べる」事は勿論、実は多様な取り上げ方、学習内容がある。日本教育大学協会全国家庭科部門特別委員会・食育実践調査は、「食事バランスガイド」「魚博士になろう」など具体的なものから、食品の安全性、身土不二（地産地消）、食糧自給率、フードマイレージなどをはじめ、様々な体験学習、食文化の継承を目指す学習など、質量とも多いことを示している⁽¹⁾。

著者が調査したところ、現在見えなくなった生産現場を知り、食は「命のバトン」として実践が行われている食農教育実践もある。それらには、毎年数匹の豚を数匹購入し食肉センターへ豚を送り、加工して食べるという自由学園の豚の飼育（埼玉県）、川上小の合鴨農法の米づくり（鹿児島県）、魚のさばきから「命を食べる」（東京・岩手県）など文字通り「命をいただく」食育である⁽²⁾。このように、食べ物の根本は、命だった、その命をいただくことによって、われわれ人間が存在するという意味を知る上で重要な実践である。

しかし、この「命のバトン」の教育が浸透せず、「かわいそう」「残酷」などの理由から、このような実践が低迷していることも事実である。その理由は、飼育経験自体の不足と飼育による教育的効

果の普及の遅れ、担当教員の知識不足などが考えられる。そして労働現場の実情を知らず、解体作業業者への感謝などが子どもたちに形成されていないのではないと思われる。

2. 研究の目的と問題意識

そこで本研究は、未来の教育を担う教員志望の大学生を対象に映画『ブタがいた教室』⁽³⁾を視聴し、その感想と視聴後の意識調査から、この授業の評価をケアリングの視点を通して行うことを目的とする。

映画『ブタがいた教室』DVD版は、小学校学校教育現場での「食育授業」である。学校の様子、学校運営に携わっている教職員、学校経営の様子や子どもたちの飼育の様子が網羅されている。しかし、この映画の授業には、「食育」を扱ったものであるとはいえ、動物飼育による①授業の導入②飼育の目的③ケアにおける動機転移（特に食する目的から飼育途中で豚を逃がす・豚を食べたくない・継続飼育へと変化の顕著さが見られる）から子どもたちの決断の苦悩の過程があると思われる、その原因はこの映画の教員の「ケアリング」の理解が十分でなかったのではないかと、という主題仮説をたてた。

ここで、ケアリングについて少し説明する。ケアリングとは、ケアする場合にその対象の知識や忍耐、信頼が必要で、ケアするなかで対象への思いやり、知識・技術を伴う能力、良心が芽生え、自分自身が成長するというところに特徴づけられている⁽⁴⁾。ここ最近、医療領域や介護などで盛んに研究されている。今までケアされる側の効果は多

くの研究成果がある。しかし近年ではケアする側にもケアすることで成長があるということがあり、ケアする側とケアされる側との関係をも含む概念である。さらに人間と人間だけでなく、ケアリングには、動植物の世話による効果もある⁽⁴⁾⁽⁵⁾とされている。また、動植物とかかわりあう中で自己だけでなく他者への深い思慮など、周りとの共同関係への影響も期待できる、概念である。

特にノディングスは、人との関係性のなかでケアリングを捉えており、ケアを行うことによって、その関係性もケアも変化をする(動機転移)、と主張している。

このように本研究は、ただ単に動物を食するというのではなく、子どもたちの動物飼育がもたらすケアリングの変化をDVD視聴後の感想文と意識調査から探る上で大変意義がある。

3. この研究の全体像と視点—ケアリングとの関連で

この研究の全体像は、以下2つの調査による。

- (A)映画『ブタがいた教室』DVD版視聴の自由記述感想文分析
 (B)学生の意識調査
 である。

(A)映画『ブタがいた教室』DVD版視聴の自由記述感想文分析

(B)学生の意識調査

『ブタがいた教室』の授業評価

この2つの調査分析から、『ブタがいた教室』の評価をケアリングとの関連で行う。

ケアリングについては上記でものべたように、ケアを行う方にも成長が見られること、対象とのケアが変化することであった。今後家庭科の学習内容などや、より発展的なカリキュラムを再構築する場合、重要な概念ではないかと思われる。なぜならば、家庭科は直接的に人間(生命)とその家庭生活(物の事象)を対象とし、またそれらの相互作用関連の上に問題解決法を行うからである。この研究では、「食育」すなわち従来の家庭科学習範囲の「食物領域」だけでなく「保育領域」

や「家族関係」にかかわる「生命」を取り上げ、世話する・育てる・しつけする・教える・食べ物を作るなど総合的なこととして特に「ケア」があり、したがって、ケアする関係性としてのケアリングも含まれ、ケアリングが家庭科において重要な位置付けをはたすのではないかという研究仮説のためである。

4. 方法

(1)調査対象と期間

鹿兒島の大学に通い、教員志望の大学生40名(男女各20名)を対象とし、意識調査を行った。調査は、教員養成小学校家庭科専門科目の『人間と生活』から、以下2つの調査を行った。

(A)映画の視聴と自由記述感想文分析

(B)視聴後の意識調査
 である。

調査項目は以下の通りである。(1)基本的属性と飼育経験の有無、動物の好き嫌い(2)『ブタがいた教室』に関わる評価(3)ケアリングの意識である。期間は2009年7月に行った。

未来の教員である教員志望の学生は、子どもとの関係性から、特にケアリングを他の職種より獲得する存在であるとして対象に選んだ。また、この調査は教員養成授業『人間と生活』の大学教育実践の一環である。

(2)調査及び調査における分析視点

①映画『ブタがいた教室』は、小学校学校教育現場での「授業」のひとつであった。そこで、事後調査(B)はこの映画の授業構成である(1)目的(2)導入(3)展開(4)評価について、授業における学習過程の視点から調査及び分析をする。また調査結果に対して、男女別に差がある傾向が見られたものに対しては提示し考察を行う。

(3)大学の授業・講義について

映画『ブタがいた教室』の新任・星先生が述べているように、生産現場と消費の著しい乖離という現実を見据えた。それらから、大学の授業の内容は、食品の安全性、食糧自給率など今問題になっている食問題について3回分を講義した。映画視聴はそのうちの1回である。

大学の講義内容『人間と生活』 3 / 15回

- ①食品の安全性・栄養
- ②食料自給率とフードマイレージ、環境
- ③映画視聴

映像を取り上げる理由は、以下の理由からである。第一に今回は直接的に「飼育」出来る環境が整備されていないこと、第二に、体験学習の効果が予想されるが⁽⁶⁾、代用及び積極的な活用として映像文化を取り入れた。

(4)映画『ブタがいた教室』DVD版のあらすじと授業構成

a. あらすじ

新任星先生は、豚を飼って食べようとクラスに呼びかけ、豚を飼うことになった。豚の飼育を通じて子どもたちに様々な変化が生ずる。例えばケアすることで情が移り、豚を「食べない」と子どもが宣言し、学級論議が開かれたこと、「豚を逃がす」行動、嵐や病気時に豚を心配するなど、対象に対する変化である。

学級では、正反対の意見の子どもが当初、いがいみあっていたが、その後仲良くなるなど、子ども同士の中でも変化が生じた。また、教員同士や管理職・保護者との関係が描かれ、それら全ての過程を経て、豚の処分について決断がなされる。

b. 「ブタがいた教室」の食育授業のおおよその学習展開

次におおよその学習展開を表1にまとめた。

表1 ブタがいた教室の食育授業のおおよその学習展開

学習過程	児童の主な活動
目的	みんなで豚を飼い、食べる
導入	教室に豚を持ってきて「みんなで豚を飼って食べよう」と呼びかける
展開	<ul style="list-style-type: none"> ・豚小屋の製作 ・Pちゃんと命名する ・Pちゃんと遊ぶ ・Pちゃんの食事・排泄のケア ・嵐・病気などの心配・獣医師の手配 ・制服の女の子が豚を逃がす ・クラスの継続飼育の論議 ・豚を食べる・食べないの論議 ・継続飼育への働きかけとその結末 ・各家庭内での子どもの様子(順不同)

結果と評価	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスでの論議 ・担任の決断 ・卒業式 ・食肉センター配送 ・Pちゃんの見送り
-------	--

5. 結果と考察

(1)『ブタがいた教室』の自由記述感想文(A)

まず、映画の自由記述感想文を揚げると、表2のような感想が得られた(表2)。

表2 学生の自由記述感想文

(A)「食育」と食育の本質とは、何かをとともよく描いた作品だと思う。ただ、スーパーに並ぶ肉や野菜を買って食べても、他の動植物の命をもらう事で自分たちが成り立っている事を認識は出来ない。実際に、しかも同じ哺乳類を飼う事で、子どもたちが感じるものは、植物の栽培とは全く別のものではあるはずだ。
(B)命あるものを授業で扱う事は、とても大切なことであるとともに、いつかやってくる死というものに向き合わなければならないということであると改めて感じた。
(C)正解はない。命と向き合うための授業ということで、ブタを飼い始めるというのがまず、すごいと感じた。教頭先生も反対をし、他の教師は教科書と言葉だけで命について子どもに教えようとしている。この先生は、子ども達に正面から命と向き合って欲しいという思いをもち、その情熱が伝わって3年生の担任の先生も理解を示してくれた(継続飼育)。教育現場では、こういう風に他の教師からの影響は大きいのだろうと感じた。

A学生の場合、現代の消費状況を把握しており、その食材が何でできているのか、どこから成り立っているのかを見ている。さらに子どもたちがそれらに対して特に体験を通してわかるものである、という点をみすえている感想を書いていた。

B学生の場合も、生きている事はやがて死につ

ながる、という命のバトンとして表現されている。身近に死を見ることができない状況というのも、生産現場と消費がいかに乖離しているかを伺わせられることを示している。

C学生の場合は、教育現場のなかでも、教育実践をする場合、教員同士の理解と協力についての感想を持っている。

これらの感想文のように、「自分たちの命は他の動物の命から」「命を扱う大切さ」の他、教育現場での教師間の理解と協力について言及し、多様な学生の感想が散見できた。

また、性差を持った感想は見られなかった。

しかし、大学生の感想文は、語彙の数、文章の数が多く、また映画を単純に「よかった。悪かった」という評価ではなかった。そこでより客観的・詳細にわたり評価をみるため、次のように分析をすすめた。

(2)分析方法についてーカテゴリー分析

まず、個人々の文章を一文ずつに分け、さらに類似語句をカテゴリー化した。カテゴリー別に分けた結果、総数233カテゴリーを得られた。ここでは、総数分の各カテゴリーとし、割合を出した。まず、一人当たりどのくらいのカテゴリーを書いているかを全体数40人で割った結果、一人当たり5.8強のカテゴリーとなった。したがって、感想文からは、多様なカテゴリーが検出され、この映画に対する評価も多様であることが伺われた。

次に、総カテゴリーを例のように分類した。例えば、「命のバトン」「命と向き合う」「生命に感謝」という語彙がある場合は、①の分類「生命・生命倫理」のカテゴリーに入れた。以下同様に行い、語彙が重複している場合は、複数のカテゴリーに重複して類型化した(表3)。

表3 カテゴリー別とカテゴリーの語彙

カテゴリー	学生の語彙 (例)
①生命・生命倫理	命のバトン・死・食べさせてもらっている・命を取扱う・生命に対する責任・命への感謝
②内容についての感想	重たい話・難しい・素晴らしい授業・よかった

③教師・教師像	自分が教師だったら・教師はこうであつたら
④子どもたちの様子	子どもたちの話し合い・涙を流した様子
⑤ケア・ケアリング	豚を世話した・飼育・飼育して心配した・楽しかった
⑥学校関係・保護者	校長先生・他の教師たち・保護者は過保護

その結果、総数233カテゴリーのうち、「生命・生命倫理・感謝」が66数(29%)、次に「内容についての感想」が57数(24%)、「子どもたちの様子」が42数(18%)、「ケア・ケアリング」が37数(16%)、「教師・教師像」が19数(19%)、「学校関係・保護者」が12数(5%)で、図1のようになった。

カテゴリー化したうち、「生命」「生命倫理」と答えたものが一番多く、全体の約30%であった。このように「命のありがたさ」「命の結び」などを指摘するのが多い理由は、以下のことと思われる。すなわち、われわれが生きているのは、他の動植物の命をもらって生きているという、この映画のテーマをしっかりと受け止めている様子がわかった。

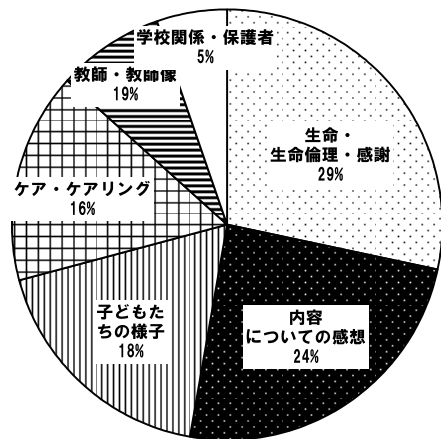


図1 カテゴリーの割合

また、学生が回答した「生命」などのカテゴリーが多いのは、子どもたちの話し合いのシーンから、「命の長さは誰が決めるの」「P(豚の名前)ちゃ

んを食肉センターに送るのは、殺してしまうことだ」という学級会での発言などの影響も大きかったからであると思われる。

次に、「よかった・難しい」など、映画・授業などへの「内容についての感想」のカテゴリーが57数(24%)であった。

このカテゴリーをさらに、映画への評価ごとに分析を試みた。そのうち、映画へのプラス的な評価、例えば「よかった」「素晴らしい」が58%であった。「つまらない」「悪かった」などの否定的な感想は全くなく、それに対し、「大変難しい」「重たい」が41.8%で、意見が二つに割れた。

このことから、この映画は学生にとって動物飼育がもたらす、子どもたちの生き生きとした、話し合いで友達同士向き合ったことの他、命の重みをずっと子どもたちが受け止めたことなど、全体的に深く考えさせられる内容の映画(授業)であったのではないだろうか。

次のカテゴリーで多かったのは、「子どもたちの様子」が18%、「ケア・ケアリング」を捉えたカテゴリーが16%であった。「教師・教師像」のカテゴリーが19%であった。今回ケアリングの視点からみると、数字的には少ないが、子どもたちの様子やケアに対する事実認識は理解している学生もいるということが明らかになった。また、「自分が教員だったら」ということも、広いケアリングと考えれば、全体では「生命・生命倫理」のカテゴリーを上回る回答である。これは、同化するという意味で、教員志望の大学生ならではの感想であると思われる。

よって、ケアリングという視点で感想文を分析した結果、多様な思いを綴った感想があることが明らかになった。

事実、高度に発達した資本主義経済の中で「消費」だけが巨大化する中で、「生産」の部分を見せない「食育」の有り方には問題があるのではないだろうか。つまり、「食べ物」は単なる「モノ」ではなく、「命」であるという食教育が必要と思われる。飼育という経験からケアリングを考慮した中で、動物の死が動物だけでなく、人間への思いやりやケア、それらを阻むものへの怒り、将来を切り開いていける力の育成である食教育が望ま

しいと思われる。

教材として使用した今回の映画は視聴中も泣いている学生も数人見られ、かなりインパクトが強かったと思われる。また、将来の自画像など、この映画の影響を受けて考えている学生の様子が伺われた。次に、視聴後の意識調査について分析を進める。

(3)映画視聴後の意識調査(B)

調査内容は、基本的な属性と飼育経験の有無、動物の好き嫌い①『豚がいた教室』の授業の導入と子どもたちのその事前調査学習について②飼育にあたって、飼う目的の相違-「ペットとして飼う」「食べるために飼う」との違い③飼育を通しての子どもたちの変化④動物の処分についての話し合い⑤飼育のケアリングと効果⑥今後の飼育の目的の6項目である。

基本的な属性は、女子20名男子20名である。飼育経験は動物の好き嫌いを「好き」「大体好き」「あまり好きではない」「嫌い」と4つの中から回答を求め、「好き」「大体好き」の合計が73人(91.3%)であった。飼育経験は33人(82.5%)の高率であった。動物が好きで飼育経験もあるという結果である。

①授業の導入について-事前調査学習・話し合いについて(映画の授業導入)

a-1. 授業の導入について

「授業の導入に豚を教室に持ってきたこと」を「適切」「やや適切」「あまり適切でない」「不適切」の中から1つ選択してもらった結果、「適切」「やや適切」合計が30人(75%)と答える学生も多い反面、「あまり適切でない」「不適切」が10人(25%)と回答があった。

次に飼育への事前学習と話し合いについて学生に回答してもらった。

a-2 飼育への事前調査学習と話し合いについて

事前学習について学生に「十分」「まあ十分」「やや不十分」「不十分」と4つの中から1つ選択回答してもらった結果、「十分」が5人(12.5%)、「まあ十分」が10人(25%)、「やや不十分」が21人(52.5%)、「不十分」が4人(10%)であった。このように、学生は半数以上が事前調査学習につ

いて「やや不十分」「不十分」と捉えていた。

次に「子どもとの話し合い」は、「十分」「まあ十分」の合計19人(47.5%),「やや不十分」「不十分」の合計21人(52.5%)で、意見は割れた。何れにせよ、飼育するに当たっては対象の動物の習性、飼い方など事前学習が必要不可欠と思われる。

著者は、導入に豚を入れたことは間違いではないが、子どもにじっくり意見を聴くことや飼うに当たっての調べ学習の不十分さを指摘したい。単に豚を教室に持ってきては、映画のように「かわいい」「飼いたい」というだけに始終してしまっている。これでは後で問題になる「動機転移」後の処置の仕方が残酷で子どもたちが納得できないことになってしまう。しっかりと目的をもち、子どもたちと十分に話し合うことが大切であると思われる。

②飼育目的の相違について(映画の授業目的)

a-1 飼育目的

次に飼う目的について「ペットとして飼うことと、食べるために飼う」が同じかどうかの質問に対して回答してもらったところ、「ペットとして飼う」と「食べるために飼う」とは「異なる」と答える学生が40名中35人(87.5%)で殆どが「異なる」としていた。しかし、5人は「同じ」と回答し、自由記述で理由を書いてももらった結果、3人は無記名で「殺すことに変わりはない」が2人であった。つまり、目的や飼う過程を重視するより、結果として「同じ」という意識していたことがわかった。

a-2 「食べる」という設定で動物を飼うこと

次に「食べる」という設定で動物を飼うことの間に対して、「他の動物でよい」が約67%であった。人と応答性があまりない「鶏」や「ひよこ」として例を挙げている反面、「牛」というのもあった。学生は、「命の手ごたえ」(星先生のせりふ)に影響を受けていたと思われるが、どちらかというところ、「血を見ない」無難なものを選択していた。

授業目的とするならば、飼育目的を明らかにし、飼う事によって子どもたちにどんな力をつけさせたいのが映画のシーンにはない反面、児童の豚へのケアの入れ込みから見ると、この映画(授業)は動物飼育の効果と子どもたちへの影響では成功

している。

③飼育を通して子どもたちの変化—ケアリング効果(映画の授業展開)

飼育を通して子どもたちの変化をどのように捉えているか、特に印象であった項目を選択してもらった(二択回答)。その内容は、ケアとケアリング効果があると思われる項目で、映画の言動シーンから9項目を設定した。内訳は以下の通りを設定した。

「飼育の話を家族にする」「友人同士助け合った」「豚に食べ物を持ってくるようになった」「病気や嵐の時に豚を心配する」「豚と遊んだ」「豚と一緒にいて楽しい」「制服の女の子が私服に変わった」「意見を言うようになった(Pちゃんにカンして)」「豚肉を拒むようになった(Pちゃんへの共感)」「その他」である。

この結果、「助け合った」が全体の21人、「意見を言うようになった」が19人、「病気や嵐のときに心配する」が11人、「豚肉を拒む」が9人であった(図2)。

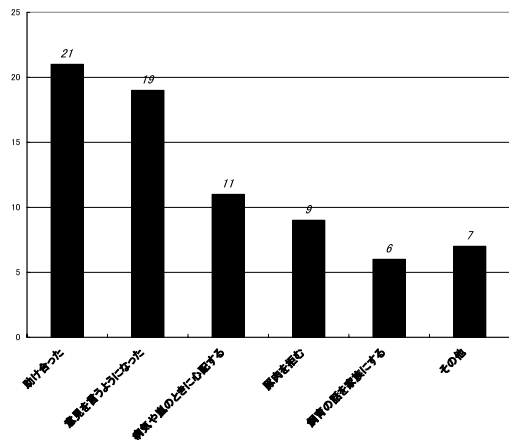


図2 「子どもたちの変化」の認識

前項目の2つ「助け合った」「意見を言うようになった」は飼育を通して子ども自身の成長であり、学生は子どもの成長を捉えていたと思われる。後者の2項目「病気や嵐のときに心配する」「豚肉を拒む」は対象へのケアについてである。この比較からみると対象へのケアより子どもたちの変化をより捉えていたことがわかった。

何れにしても飼育を通して、対象のことを思いやり、自分自身が成長するというケアリング効果を学生は捉えていた。

④子どもたちの話し合い（授業展開）—動機転移 a-1 話し合いの質について

「(豚を) 食べる・食べない」の学級での話し合いは「十分」「まあ十分」「やや不十分」「不十分」のうち、「十分」「まあ十分」の合計34人(85%)であった。このように多くが「話し合い」については評価していた。

a-2 多数決についての考え

また、「生命」について「多数決」で決めることにたいしてどのように考えるかという問に対して、「多数決でよい」「十分話し合った後、多数決」「十分話し合い、その結果子どもにまかせる」「十分話し合うが多数決は行わない」の中から1つ選択してもらった。

その結果、「多数決」が1人(2.5%)、「十分話し合った後多数決」が23人(62.5%)であった。「十分話し合った後、子どもにまかせる」が5人(12.5%)、「十分話し合うが多数決はしない」が9人(22.5%)であった。多数決を取る学生が半数以上という結果であった。このように生命について「多数決」できめてしまう傾向が見られた。

男女別にしてみると、「多数決」1人が女子、「十分話し合った後多数決」が女子16人に対して男子が7人のように女子の方が文きり型ということがわかった。

⑤担任が飼育動物を「食肉センター」に送った評価について（映画の一般的授業評価）

この映画の結末（授業の結末でもある）の評価について「適切」「やや適切」「あまり適切でない」「不適切」の中から1つを選択してもらった。また理由を自由記述で書いてもらった。

その結果、「適切」が18人（女子8人男子10人45%）、「やや適切」が13人（女子8人男子5人32.5%）、「あまり適切でない」が4人（女子1人男子3人7.5%）、「不適切」が5人（女子3人男子2人12.5%）であった。

映画の一般的な評価は賛否両論であり、本研究は「適切」「やや適切」の合計31人(77.5%)が評価を「適切」としている。しかし、少数では在っ

たが、「目的と異なる」「食べると言っていないながら食肉センターに送るのは逃げている」「多数決とよいながら教師の最後の決断となった」など問題もあがっていた。

当初この映画の星先生の「ケアリング」に対する意識が十分ではないのではないか、という仮説をたてた。これらの学生の意見からすれば、星先生の言動はまさにこのことを裏付けている。星先生の言動は「ブタを飼って、みんなで食べよう」であった。単に食するのであれば、ブタに対する処分について「話し合い」をする必要はないし(④)、⑤の担任が最終決定する必要もなく、「食べると言っていないながら食肉センターに送る」ことはなかったのではないだろうか。さらに、途中に「継続飼育」という子どもの発案もなかったのに違いない。

それにも増して、飼育をする中で子どもたちの変化が予想以上のものだった——映画はこのこと自体が中心であった——まさにケアリング効果であったのである。

今後はこの点を大学生に論議をさせる課題としたい。

⑥飼育による最終処分について

「育てた豚をあなたなら食べますか」と問いにたいして「食べる」「食べない」「食肉センターに送る」「何らかの形で継続飼育」の中から選択してもらった。

「食べる」が21人(53.5%女子9人男子12人)、「食べない」が2人(5%男女1名ずつ)、「食肉センターに送る」が11人(27.5%女子7人男子4人)、「何らかの形で継続飼育」が男女とも3人合計6人(15%)であった。この結果から、男女とも「食べる」傾向にあることがわかった。男女別にみても女子の方が「食肉センターに送る」傾向があり、飼育した動物を自分では処分しない傾向が伺われた。

⑦飼育教育のケアリング効果

a 動物飼育における効果

飼育教育の効果については、「そう思う・やや思う・あまり思わない・思わない」のうち、「そう思う」だけを抽出し、男女別に分けた結果、「なごむ」が30人(75%)のうち女子17人男子13人、

「世話の方法が学べる」が33人 (82.5%) のうち女子19人男子14人, 「責任感が養われる」が32人 (80%) のうち女子18人男子14人, 「動物との間に相互関係が生まれる」が37人 (92.5%) のうち女子18人男子19人, 「心情が深まる」が34人 (85%) のうち女子18人男子16人, 「自己肯定観が得られる」が25人 (62.5%) のうち女子17人男子13人であった (図3)。

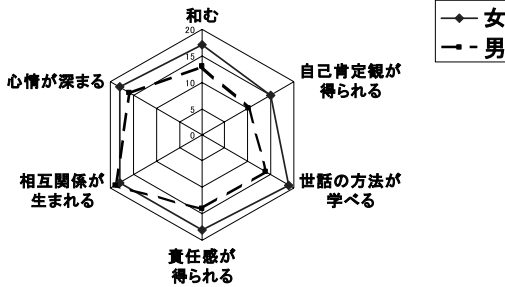


図3 ケアリング効果 (男女別)

このように動物飼育全体にかかわる意識はケアリング効果があると捉えられており, 女子の方が男子よりケアリング効果が高いと判断していた。また, 何れの場合も肯定的な回答を得られた。特に, 動物と子どもたちの相互関係が生まれる, と学生は捉えていた。「自己肯定観がえられる」は他の項目に比べ低かった。自己肯定観が日本の子どもは低いということから⁽⁷⁾, 飼育を通しての体験活動や支援方法を今後はさらに重視すべきではないと思われる。人あるいは動植物にたいして役に立つとはどういうことか, 育てることで得られることなど, 子ども同士の交流が必要と思われる。

また動物飼育をするにあたって, 地域と学校教育などネットワーク作りも必要であると思われる。

6. まとめと課題

意識調査と感想文の分析から, 大学生は飼育をすることによる子どものケアリングを捉えられていた。

感想文分析では, 多様なカテゴリーがあり, 特に「生命」「生命倫理」など食育の基本を捉えて

いた。

映画の動物飼育に関わる授業評価については, 飼育目的や飼育対象の事前調査が不十分であると捉えられていた。今後食育で扱う飼育については特に子どもたちへの影響を考え, 事前調査を十分に行わせることが必要かと思われる。

映画授業展開における子どもたちの動物飼育を通して, ケアリング効果があることを学生の意識調査から示した。また, 子どもたちの話し合いについては十分話し合っていると評価していた。食育で動物飼育を行う場合は「動機転移」を考慮しつつ, 子どもの発達段階に応じた飼育と準備(動機付け・授業の導入), 目的を学習内容や学習過程に求めたい。

今後映画『ブタがいた教室』の教材の活用だけでなく, これらの結果から大学で実際に飼育経験を大学生に課するなどが課題である。また地域, 獣医師など支援・援助体制をとりつつ, 大学生が小・中・高校の教育現場で実習支援として行うと良いと思われる。

[注記]

- (1) 日本教育大学協会全国家庭科部門特別委員会「家庭科における食育を考える」報告書 2009 pp. 8-22, pp. 37-46
- (2) 月刊『家庭科研究』NPO法人日本家庭科教育研究者連盟「小学校の食物学習『命を食べる』, 2007 pp. 14-18
- (3) 「ブタがいた教室」製作委員会『ブタがいた教室』DVD版 日活株式会社 2008
- (4) ネル・ノディングス ケアリング—論理と道徳の教育助成の視点から 晃洋書房 第7章 動物, 植物, 事物, 観念に対するケアリング 1997 pp. 29-263
- (5) 溝口綾子 幼稚園における動物介在教育の実践—身近な動物とのふれあい体験を通して— 教材学研究第18巻 2007 pp. 219-226
- (6) 齋藤美保子 ケアリングを高める飼育・栽培の授業開発 教材学研究18巻 2007 pp. 263-270
- (7) 佐藤淑子 日本の子どもと自尊心—自己主張をどう育むか 中央公論社 2009 pp. 24-25